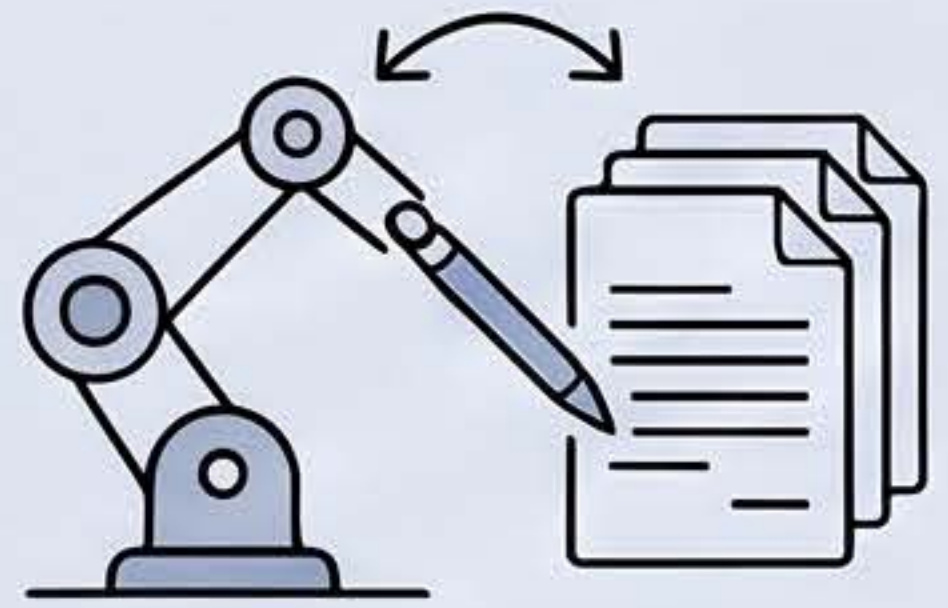


知財業務の変革：拒絶理由対応AIの進化 2025年 vs 2026年

2026年の「知財・情報フェア」では、中間対応AIの役割が劇的に変化しました。従来のAIは「書く（ドラフト作成）」ことが中心でしたが、2026年には「考える、える（方針検討）」プロセスや、実データ（判例・統計）の参照、AIと人の役割分担へと焦点が移っています。

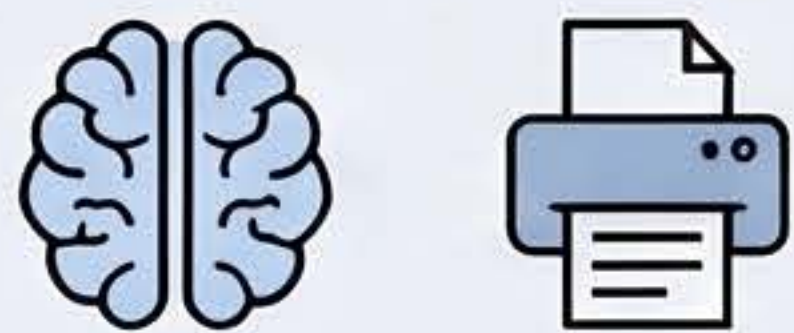
2025年: 効率化・自動化への熱狂 (Efficiency & Automation)



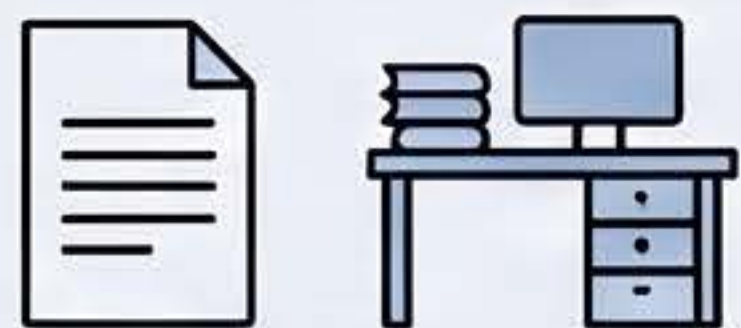
「書く」支援
文書ドラフト、対比表作成が中心



訴求メッセージ:
業務の効率化・自動化



技術設計: 汎用AI、文書生成
2025年は文書生成が主



支援範囲
ドラフト作成のみ

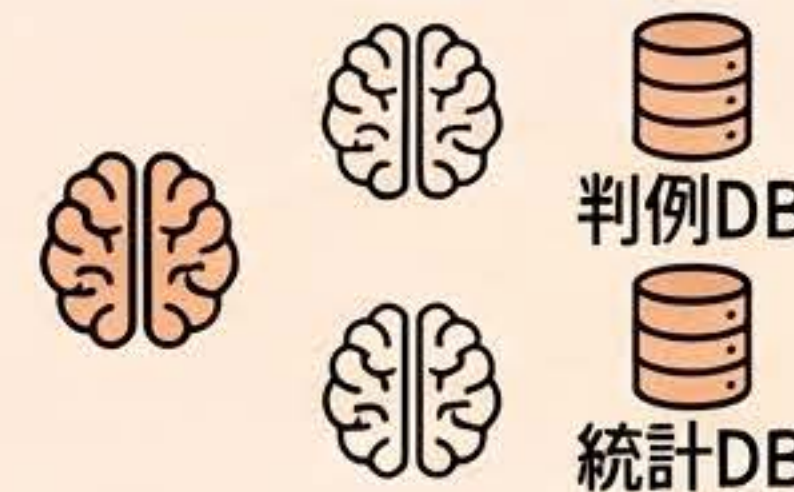
2026年: 質と責任、人間との協働 (Quality, Responsibility & Collaboration)



「考える」支援
方針の壁打ち、実データ参照、
クライアント対応が可能に



訴求メッセージ:
判断の質、AIと人の役割分担



技術設計: 特許特化型インテリジェンス、MCP連携
判例・辞書DBとの高度な連携が一般化



支援範囲
クライアント対応、提出工程連携まで拡大